

日米医学協力計画 50 周年記念式典から



結核予防会結核研究所
名誉所長 森 亨

去る1月11日-12日、日米医学協力計画50周年記念式典および集会在米国ベセスダ市で開催された。式典にはこの計画にもとづく各分野の両国の研究者、運営にあたる親委員会の新旧の委員に加えて、両国政府の代表（日本側太田厚生労働大臣政務官、佐々江駐米大使、米国からはファウチ国立アレルギー・感染症研究所長、コーカー保健福祉副長官）などが出席して、日米計画にとっては10年前に京都で開催された40周年の式典以来の盛大な行事となった。式典の中でこれら政府代表のあいさつに引き続き、日米それぞれの親委員会委員長（日本は日本医療研究開発機構の岩本愛吉氏）の歓迎、つづいて協力計画のこの50年の歩みを総括する講演があった。

本計画は、結核予防会にとっては、結核研究所の研究者の多くが「結核・ハンセン病部会」に関わってきたことはもちろん、当会島尾顧問が日本側親委員会委員長（1993-2000年）を務められたり、当会本部に日本側の事務局が一時置かれたりして、なじみの深い研究・国際協力の事業である。

さて、この計画は1965年、米国で行われた佐藤総理大臣とジョンソン大統領の会談に基づき、アジア地域における健康問題の研究を両国が協力して進める、ということで発足した。日本では外務省、厚生省、文科省が事務方を受け持つこととなった。両国の代表委員（親委員会委員）による合同委員会のもとで、とり上げられた問題としては当初は結核、ハンセン病、下痢性疾患、マラリア、ウイルス性疾患、低栄養などであり、これらはそれぞれ「部会」を構成、両国の部会が交流しつつ研究協力を推進してきた。途中、結核とハンセン病部会が合併、あらたに急性呼吸器疾患やエイズ、環境・遺伝子（のちに発がん要因）の部会が設置、そして免疫ボードという縦断的・全部会共通の部門が設置されたり、と部分的な改編が行われてきた。また1996年からは「アジア太平洋新興感染症会議」をアジアのいずれかの国ではほぼ毎年開催、アジアを中心に各国の特に若手の研究者を招へいしてきた。

今回の式典講演の中でも指摘されたようにこの計

画の初期の時期は日米双方で「感染症の時代は終わった」というムードが漂った時代で、この分野の研究者たちは経済的にも厳しい状況にあり、この計画はまさに慈雨に等しかった。さらに日本の研究者にとっては、支給される研究費が他の研究費と違って外国出張に自由にあてられるため、多くの若手研究者に米国出張の機会が与えられ、研究が大いに刺激されるという重要な効果があった。

なお、式典の最後にこの計画の功労者が両国から5人ずつ顕彰された。日本側の功労者は島尾忠男先生（予防会顧問）をはじめ、竹田美文（もと国立感染研所長）、笹月健彦（もと国際医療センター総長）、清野裕（関西電力病院長）の各先生、それに筆者である。

式典のあと、ブルース・ボイトラー（テキサス大、ノーベル賞受賞者）および清野宏（東大）各氏による記念講演、レセプションに引き続き、今回は少し趣向を変えた「新興感染症会議」が1日半開催された。感染症の話題を「病原体」、「感染細胞」、「感染宿主」、「集団」に分けて、各関連部会から演者を選んで講演・質疑を行った。引き続き2-3日は各部会による研究発表（口演、ポスター）があり、結核・ハンセン病部会では結核研究所からも慶長部長ほかが出席した。

近年は日米双方でそれぞれの行政上の都合から本計画の機構・運営にも改定がなされており、次の60周年までの道は平坦とは言い難いが、それでも今回の日米双方の研究者の集まりからは、実のある協力を続けていきたいという盛んな意気込みが感じられた。🐼



功労賞楯に使われた式典のロゴ